

小・中学生の体型の推移

—1967年と1979年との比較—

鹿児島大教育 竹ノ内友子 鹿児島県立短大 茅野艶子・坂ノ上まり子

目的 青少年の体位の向上には、目覚しいものがあることが、文部省の学校保健統計調査でも明らかである。今回は、成長期にある児童・生徒の衣服寸法に關係の深い部位について、体型の推移を把握するために、鹿児島市の小・中学生(7~15才の男子計902名、女子計910名)を被験者として、1967年計測値と1979年計測値の資料をもとに、年令別、性別に12年を距てた動向の比較、考察を試みた。

方法 計測は、マルチン氏人体計測器による。研究項目は、高径7項目、肩径7項目、長径5項目、その他3項目の合計22項目、および若干の比身長示数項目である。

結果 1. 身長 of 平均値は、男女全年令ともに1979年値が上まわり、15才では男子163.94cm(1967年 \bar{x} =160.19cm)、女子155.43cm(1967年 \bar{x} =151.78cm)となる。兩年次間に有意差($P<.01$)を示すのは、男子は7・12・13・15才、女子は9・10・11・15才の各年令である。

2. 下股長の平均値は、男女全年令において1979年値の増加が顕著にみられ、女子の12才を除く各年令に有意差(男子14才と女子13・14才は $P<.05$ 、残りの男子8年令と女子の6年令は $P<.01$ の差)を示し、身長 of 伸びには、下股長の成長度への寄与が大きく現れていることが知られる。

3. 乳頭位胸囲の平均値は、男子では8才を除く8年令において1979年値が上まわることが、有意差($P<.01$)を示すのは13才のみである。女子では8・9・10・11・13・15才の6年令において1979年値が上まわり、9・11・13才に有意差($P<.01$)を示す。